教職大学院 Newsletter No.166

福井大学大学院　福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2023.3.11（公開版）

国際展開を目指す福井大学のチャレンジ

総合教職開発本部国際教職開発部
独立行政法人国際協力機構（JICA）から出向中　高田　宏仁

2021年4月に総合教職開発本部の一部門として国際教職開発部が発足した。そのスタッフとして、また、JICA という組織で海外協力に従事してきた経験者として、日頃の活動が見えにくいと言われる、国際展開の取り組みを概括しつつ、その意義について考えてみたい。

【2022年度の動き】

2022 年度は、福井大学が国際展開を進める上で、エポックメイキングな年になった。コロナ禍で往来が止まっていた交流・活動が再開されたのみならず、これまでお付き合いのなかった国との関係も新たに始まった。今年度教職大学院及び総合教職開発本部所管で、支援・連携対象となった国・事業は、従来のエジプト、タイ、東南部アフリカ（7 カ国）に加え、新たにパキスタン、ヨルダン、ジブチなどの国が増え、内容、形式とも大きな広がりを見せた（事業や活動の詳細はニュースレターNo. 155 を参照ください）。

【大学院の持つリソース】

＜海外の方は何を研修している？＞

実は、海外から研修員を呼んで行う研修や活動の実態は、日頃大学院で行われているものとほぼ同じである。実践を聞き、語り、学校現場で授業を観て、振返り、省察し、記録する。今は、海外でも教育の関心が教科中心から子どもの学びに移行しつつある。その具体を体験し、習得することで、研修員の充実した学びにつながっている。

しかし、これが実現できるのは、日本でも福井大学だけかもしれない。これまで培ったファシリテーターの力量・経験値、学校現場との繋がり・連携、行政と一体化した取り組み、どれもが貴重な資産・リソースである。加えて、多くの外国人を受け入れる上では、通訳の確保といった実施上の課題にとどまらず、生活全般にも関わる様々な工夫・段取り、調整などロジスティックな機能が必要となる。このような機能は、今後重要性は増す一方であり、むしろその強化が求められる。

【究極の学び合い】

＜外国人に教えられるのか？＞

海外協力に従事した専門家やボランティアが一様に発する言葉がある。それは「教えるつもりが教えられた」という言葉。もちろん教える技術はあり、こちらが指導し、先方が理解し習得するプロセスはあ

内容

巻頭言 (1)
スタッフ自己紹介 (3)
インターンシップ/週間カンファレンス報告 (5)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより (7)
冬期集中講座報告 (17)
実践研究福井ラウンドテーブル（お知らせ）(26)

る。しかし、その過程で、技術の意味、課題の再確認、先方の国での工夫など、勉強になることが山ほどあり、その目で改めて自分・日本を見直すことで新たな学びになるということらしい。エジプト研修に参加した先生方も口々に「勉強になった」とおっしゃっていた。

ところで、海外にも行ったことのない教員が、外国人を指導できるのか？答えは「できる」である。もちろん誰でもではないが、基本的に物事は、人と周りの環境の関わりで起きる。人の想いや行動様式を理解し（コミュニケーション能力を含む）、自然環境、組織、リソース（ヒトモノカネ）、文化的背景、社会のニーズなどを俯瞰的に把握し、かつ主体的に行動できる方は、どの世界にも必ずいるというのが、国際協力に30年関わっての実感である。今、さらりと言ったが、この中でも難しいのが文化的背景の理解と言語（コミュニケーション）である。エジプト研修に参加されている先生方が困難に感じる部分はここだと思うが、これを乗り越え、国や文化を超えた究極の学び合いを楽しんでいらっしゃるのは、頼もしい限りである。

【教育現場での国際化】

＜福井県内への還元は？＞

国際教職開発部では、福井の学校現場でも国際の体験をしてほしいと考えている。それは、前述の究極の学び合いに資するという点と、狭くなった世界を身近に感じることができるという点からである。現在の若者（特にZ世代）は、ITCを使いこなし、様々な探究活動を経験し、豊かなコミュニケーション能力を持っている。海外の研修員との交流などを通じたダイナミックな国際の経験が、若者の更なる好奇心や探究心を引き出し、福井の再国際化につながってほしいと考えている。また、学び合いという観点では、教員を始めとした学校関係者にこそ国際の体験の機会は貴重だといえる。日本や福井の教育の良さと課題を再確認できる機会を提供していきたい。

【知と人材の結節点としての大学】

＜大学が国際協力を行う意義は？＞

このように大学が行う国際展開は、国際的な活動にとどまらず地域の発展・活性化とも密接に関係している。福井大学は2040年の未来像として「世界に通じる地方総合大学」と「社会から頼りにされる、活力ある大学」を目指している。一見離れて見える２つの目標だが、未来の大学では２つの取り組みはコインの表裏のような関係になるだろう。国際展開の活動もそのような未来像を目指している。

【財務的な意義】

＜国際は負担なのか？＞

もう一つ大きなことがある。これらのほとんどはJICA を始めとした外部組織からの受託業務であり（＝外部資金の獲得）、その総額は、年間約6000万円となっている。この中には、経費に報酬が含まれているものあり、高度な知見を有する大学教員に対し市中の専門家・技術者と同様の付加価値を認めているものといえる。科研費を含めた研究費の総額との比較はナンセンスだが、大学本来の教育・研究機能をこえて地域に貢献していくための活力、能力を維持していく上では、小さくない金額だと考える。私の立場からは是非拡充を求めたいが、大学院としてのコンセンサスを得つつ、今後の方向性についての活発な議論を期待したい。

【最後に】

＜アフリカの大地から＞

現在、出張中のアフリカで現地の先生へのサポートを行いながら、日本の先生の長期実践報告を読むと言う、少々不思議な体験をしている。改めて日本の先生の熱意と努力と工夫を目の当たりにするとともに、アフリカの先生の苦労、焦り、期待をひしひしと感じる。この両者が出会い、学び合うことで、より良い世界を紡ぎ出すことができるのではないか、そして福井にとっても新たな学びになるのではないか、改めてそう感じている。

福井の経験を世界に役立てともに学ぶ、簡単ではないが、そのために我々も努力していきたい。そして、みなさんの理解と知恵・アドバイス、何より参加をお待ちしている。

スタッフ自己紹介

学校の外から教育に関わるということ

福井大学連合教職大学院 コーディネートリサーチャー 後藤 正邦

教職大学院のスタッフに名を連ねて半年以上経ちました。この間、ラウンドテーブルや、集中講座などに参加させていただきましたが、その際に自己紹介をすると、院生さんが皆さんかなり目を丸くなさいます。私の本業は弁護士だからです。

ではそんな私がなぜ教職大学院のスタッフに選ばれたのか…実は、私もその理由は知りません。弁護士として、新任教頭研修や生徒指導研修などの講師を担当したことは何度もありますし、現に学校事故などの問題に対応したこともありますが、そういったことは理由ではないでしょう。恐らく、客員教授をお務めであった玉木洋先生は以前から私の「本業外」の活動をよくご存知だったので、それゆえに私をご推薦くださったものと考えております。

私が広い意味での教育に関わったのは、司法試験や公務員試験の受験指導からでした。その後、弁護士としての経験が増すにつれ、受験指導ではなく、より直接的な法曹養成、すなわち司法修習生や法科大学院生への指導に軸足が移りました。

その一方で力を入れ始めたのは、小中学生や高校生などに対する法教育でした。法教育とは、法律専門家ではない一般の人々が、法や司法制度、これらの基礎になっている価値を理解し、法的なものの考え方を身に付けるための教育です。法教育に関わるようになって今年でちょうど20年という、大事なライフワークです。

教員や研究者と一緒に（主には公民科などの）授業づくりをしたり出前授業をしたりするのが法教育の最も大事な部分ですが、分かりやすい大きな事業としては高校生模擬裁判選手権という大会があります。2007年に日本弁護士連合会（日弁連）が第1回の関東・関西2大会を開始し、その翌年に、全国で初めて県大会を開催したのが福井弁護士会でした。

福井弁護士会は、法教育の分野では全国でも先駆者・先導者の立場にあります。私が法教育委員会委員長（2011年度～21年度）にあった間に、福井弁護士会が童話「アリとキリギリス」をもとにして作った立憲民主主義の授業は、学校の副教材にも採用されるなど、全国に広がっています。福井弁護士会のHP（https://fukuben.or.jp/）では、動画を見ながらいくつかの授業を受けられるようになっていますので、ぜひご覧になってみてください。（なお、法教育授業コンテンツのネット公開を開始したのは、コロナ禍における人権問題や一斉休校などがきっかけでした。）

教育に関わることでライフワークにしてきたものとして、ほかにキャリア教育があります。

私は以前、公益社団法人福井青年会議所（福井JC）に所属しており、そこで特に青少年育成事業の担当として活動を重ねました。

その中軸にあったのが、キャリア教育事業「地域の担い手づくりプログラム」でした。担当責任者であ

った 2010 年にこのプログラムの受講者が年間 1000 人となり、以降はコロナ禍が直撃した 2020 年 2 月まで毎年実施校（主に中学校）がふえ続けました。福井市内の中学生（1 学年）の半数を超える年間 1500 人以上がこのプログラムを受講していたのです。

2015 年 11 月には、この事業をさらに推進していくために「ふくいの担い手づくりプロジェクト」という団体を立ち上げ、以後、2021 年 6 月まで、5 年半あまりにわたってその会長を務めさせていただきました。

このプログラムは、学校に、地域社会で活躍している社会人を講師としてお迎えするものですが（いずれ詳しくご説明できる日が来ると思いますので、ここでは簡潔に…）、その仕組みが、学校と地域社会をつなげるものであるということと、コミュニケーションの双方向性を意識したものであることにおいて、よく行われている社会人講話とは根本的に違うところです。その実績が評価され、「ふくいの担い手づくりプロジェクト」は、2018 年度にキャリア教育アワード最優秀賞・経済産業大臣賞を受賞しました。

そんなことに力を入れているうちに、今度は PTA でもいろいろやることが大きくなっていきました。

小学校の PTA 会長や中学校 PTA 役員はもちろんのこと、福井市 PTA 連合会の常任理事として 3 年、さらに同連合会の会長を 2 年、同時に福井県 PTA 連合会の副会長を 2 年、そして今では高校 PTA の役員も務めています（2023 年度はどうもあと 1、2 段ステップアップしそうな予感がします。）。

PTA は社会教育に位置付けられることになっていますが、活動すればするほど、実際はそれだけではなく、学校教育や家庭教育などを結び付ける（重なり合う）重要な役割を担っていることを実感します。

最近特に関心を持って注力しているのは、学校規模適正化（特に統廃合）と、中学校部活動の地域移行の問題です。これらは学校の枠内だけで解決できるものではなく、地域の方々と一体になった取り組みが必要なものですから、まさに学校と地域の架け橋であり、かつそもそも当事者である PTA の存在意義が問われていると考えています。

このように、学校の外にいる立場から、学校内における法教育（主権者教育）、キャリア教育や PTA 活動などに関わってきた経験から言えるのは、「やっぱり学校は素晴らしい」ということです。

その一方、学校・教員の課題にも気が付くことがあります。弁護士としての基本スキル・知見もベースにしつつ、諸活動の経験を踏まえた外部の視点からの気付きをお伝えすることが、教職大学院において私に期待されていることなのだろうと解釈しております。

とは言え、大学時代には教職課程の履修で挫折した（朝起きられずに第 1 限の教育原理の単位を落としたのが決定的でした…）黒歴史を持つ私は、こと教育界の中の知識・知見については全く不十分であることも自覚しています。

日本の教育がもっともっと良くなっていくよう、自分自身も勉強と研鑽を積みながら、コーディネートリサーチャーとしての務めを果たしてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

インターンシップ・週間カンファレンス報告

自分の思い描く「先生」に近づくために

授業研究・教職専門性開発コース１年/福井市明新小学校

酒井　夏瑞

「学校で窮屈さを感じている気がします…」

12 月上旬の週間カンファレンスで私が発言したことである。グループの先輩に「どうしてそう感じるの？」と訊かれたが、どうしてか分からず答えられなかった。4 月から始まった明新小学校でのインターンシップも早 10 ヶ月が経過した。インターン当初からメンターの先生との対話を大切にしながら子どもたちと関わってきた。週 1 回のインターンとはいえ、子どもたちや先生方と上手く関わることができないという問題は抱えていない。しかし秋休み明けのいつからか、窮屈さを感じるようになっていった。では、私が感じている窮屈さは何なのか。何処から来るのだろうか。3 ヶ月間考えていたが答えは出なかった。

12 月 17 日、西郷孝彦先生と語る会に参加させていただいた時に私のこの疑問に終止符が打たれた。子どもたちの様子や関わりを生き生きと語る西郷先生を拝見し、子どもの好きややりたいを引き出すことのできる先生を目指したいと改めて思ったと同時に、現場での窮屈さは私の考える「先生」というフィルターが剥がれ落ちていくことに不安を覚えたからだと気づいた。私の知っている「先生」は学生時代に関わってきた児童・生徒の立場からみた先生。恐らくこの歳になるまで「先生」を色眼鏡で見ていたのだろうと思った。

インターン先に提出する春学期のまとめで、以下のことを述べていた。

「支援や関わり方に正解はない」当然のことのようだが、私は気づいていなかった。教育について右も左も分からない私は、どのような支援や関わり方が正しいのかを知りたいと 4 月当初は考えていたのかもしれない。しかし、メンターの先生から「クラスにはいろいろな状態があるため、何が正解かは分かりません。私の声かけや行いによって良くなるか、悪くなるかも、後になってみなければ分からないことも多いです。・・・対応は１つでないと思われます。」というコメントを頂いた。秋からは支援や関わり方に正しさを求めず、焦らず心掛けて子どもたちと関わるようにしたい。

今改めて考えると、夏の時点で支援や関わり方に正しさを求めないことが重要だと気づけていたのにも関わらず、現在も学生の時に見てきた「先生」に無理矢理にでも近づけようとしていたことに全く気づくことができていなかった。「先生だから、このように指導しないといけない」「先生だからこうあるべきだ」と思ってしまう自分。しかし、そうではいけないと止めに入ろうとする自分もいる。その狭間で窮屈さを感じていたのだろうか。

先日の週間カンファレンスで理想の教育について語り合ったときに水野先生が下さったお言葉がある。「あなたは資質能力の３つの柱のうち、学びに向かう力、人間性を特に大事にしたいと考えているんだね。それに加えて大人になった子どもたちはどのような力をつけているのだろうと想像してみて。」私の思い描く先生に近づくために、子どもたちとの向き合い方を改めて考え直したいと思った。「先生」というフィルターが剥がれ落ちても、多様な人との対話

を通して自分なりの新しいフィルターをかければいい。そのために大学院での学びがあると今は考えている。

今年度のインターンや週間カンファレンスでの学びは、仲間との対話や私の上手く言葉にできない思いを言葉にして多角的な視点を提案してくださる先生方、多様な人との関わりがあったからこその学びだったと改めて感じる。私の思い描く「先生」に近づくために学びたいことが山ほどある。来年度も子どもたちと関わりながら粘り強く学んでいきたい。

教育博物館のインターンシップで得られた学び

授業研究・教職専門性開発コース 3年/福井県教育総合研究所

木原　万由子

私は今年度の 4 月から教育博物館でのインターンシップに参加をしている。学校現場ではなく教育博物館に決めたきっかけは、来年度から民間企業で事務職として働くことにしたからだ。私は内々定が決まった時点で、教員にならない私が教職大学院に在籍する意義について考えた。考えた結果、卒業までのこの一年間は社会人として自立をするための自己分析と実践の期間と決めた。そのため、実践にあたるインターンシップはなるべく事務職の内容で参加をしたいと考えていた。一か八かで大学院の先生方にこの旨を依頼したら、何と、私の無茶なわがままを聞いてくださった。この時、先生が教育博物館に決まったことを笑顔で報告してくださったことを今でも覚えている。私は受け入れ先があったことへの安心感でいっぱいになり、ただほんの少しだけ不安もあった。教育博物館は教職大学院で初めてのインターンシップ先ということである。初めての受け入れ院生が、苦手なことが多く引っ込み思案な自分では申し訳ないと思っていた。

しかし、不安はすぐに払拭された。いくつか理由がある。一つ目は自分の得意な仕事と苦手な仕事、苦手な仕事をする場合の自分の工夫についてインターンシップ当初に先生方にお伝えすることができたからだ。そのため、得意な仕事はどんどん任せていただき、苦手な仕事についてはわからない事があれば先生方に質問できる環境を整えていただいた。具体的には「〇〇の仕事は〇〇先生に聞いて」というように。そのため、仕事についていけない不安は無かった。二つ目は、予め仕事内容や時間配分について書かれた一日のスケジュール用紙を渡していただいたことである。私は一日の予定が先行き不透明なことが苦手であるため、これがあったことで休憩や特に集中する時間など見通しを立てて仕事をすることが出来た。三つ目は先生方や職員の方々との信頼関係である。先生方はよく仕事内容について、助言の他にフィードバックをしてくださった。 一つ例を挙げる。私の苦手な仕事の一つに、新しく来た教科書に同じ教科書名が書いてある栞を挟む作業がある。この作業では特にスピード以上に正確さが大事になる。私は作業をする時に早く終わらせることを意識してしまうため、正確さを意識しないまま終わることがある。この時、先生方は「今回の作業はスピード 60 パーセント、正確さ 100 パーセントの配分で進めて欲しい」と具体的な数値を仰って私の作業を支援してくださった。そして、無事に終わった時は労いの声をかけてくださった。インターンシップ生である自分が先生方の大事な仕事に共に取り組んで足でまといだと申し訳なくなることもあったが、先生方のフィードバックのおかげで次も精一杯仕事に取り組もうという気持ちになれた。自分が少しでも役に立っているという実感は私に自信をつけてくれた。得意分野である一点集中型の作業では、先生方が感謝の言葉を仰ってくださったこともあった。嬉しかった。更にお役

に立ちたいと思った。インターンシップ最終日は達成感と皆さんとお別れするさみしさがあった。

きっとある程度の自信が無いと人と関わることは怖いし、仕事に対しても怯えながら取り組むため作業効率が上がることはないだろう。私はこのインターンシップで誰かの役に立ったであろう経験で自信をつけることが出来た。基本、教員の仕事は向いていないけれども事務職なら出来るかもしれない。わからない事や心配なことがあれば一人で抱え込まずに絶対に頼ろう。共に働く人と信頼関係を築こう。仕事をすることは必ず誰かの役に立っている。社会人として必要不可欠である考えや行動を教育博物館で得ることが出来た。一年間という短い期間だったが、私にとって居場所がまたできた。

ミドルリーダー/マネジメントコースだより

福井大学教職大学院での１年間を振り返って

ミドルリーダー養成コース１年/江東区立深川第二中学校　矢成　清美

令和４年４月より教職大学院に入学し、はや１年が経とうとしています。ひとことでいうと「光陰矢の如し」という言葉がぴたりとあてはまると思います。矢のように過ぎていく日常のなかで、教職大学院のカリキュラムを通じて「考える時間」を与えてもらった経験は実に豊かで深いものでした。特に夏期集中サイクルで『コミュニティ・オブ・プラクティス』（ウィリアム・M・スナイダー、エティエンヌ・ウェンガー、リチャード・マクダーモット著）を読みながら自分の実践と照らし合わせ、思いを巡らせ、それを文書におこし仲間と語り合うという貴重な場を設けてもらったことには感謝しています。この経験がそれ以降の生徒の行動を見取る原動力となりました。まずはご指導いただいた大学院の先生方、スタッフの皆様、同期および諸先輩方へ御礼を申し上げたいと思います。教職に就いて日の浅い私のストーリーに、真摯に耳を傾けてくださり、導いてくださったことに心から感謝いたします。そしてこれからもどうかご指導のほどお願い申し上げます。

次に現任校での私自身の取り組みについて紹介いたします。生徒数３１６名、１０クラスの中規模校である本校の特色は、都心にありながら江戸・深川の伝統的な風情が色濃く残るエリアで、威勢の良い下町っ子が数多く在籍しています。令和４年７月末、校舎を改築するため１年間のみ仮校舎へ移転することとなりました。その記念行事として、旧校舎内を手形とメッセージで装飾する「思い出プロジェクト」を生徒会中心に全校生徒とともに私が運営することとなりました。くしくもコロナが収束しはじめ、運動会や文化的行事などが次々と復活していく流れに巻き込まれながらのプロジェクト発足。時間的に予断を許さない中で、さまざまな「壁」が立ちはだかり、生徒たちと手立てを考え解決していきました。そこには彼らの旧校舎への熱い思いがありました。思いはエネルギーとなり、爆発的な力へと変化し、みごと移転前日にプロジェクトは完了しフィナーレを迎えました。プロジェクトを完成したことで生徒ひとりひとりの顔に達成感が浮かび、笑顔が広がりました。ここでプロジェクトの影の立役者について語ります。現任校は３１６名のうち４２名が美術部員です。彼らの半

数は絵を描いたり、なにかを表現したりすることに長けた者たちで、もう半数は力自慢のつわもの集団です。彼らは恒常的に校舎内を季節感あふれる巨大ポスターや立体物で飾ったり、全校生徒分の美術科作品の掲示を手掛けていることから展示・装飾はお家芸と言えます。私は日々顧問として彼らに「我が校最大部員数の部活として誇りを持って学校に貢献すること」と指導しています。そして思い出プロジェクトではその統率力・協働力・創造力がいかんなく発揮され、プロジェクトを下から支えてくれました。しかしながら私自身の課題も残ることとなりました。本来ならばプロジェクトを通じて、教員同士の結びつき〈コア・グループ〉を生成するチャンスが巡ってくると予想していましたが、現実はそうではありませんでした。今後は反省点を洗い出し、再度機会が訪れることを信じて諦めることなく、何度でもチャレンジしていく所存です。このように冷静な思考を維持できるのも『コミュニティ・オブ・プラクティス』の中で語られる『七つの原則』を読み取った結果であると思います。

最後に、３０年間変わらない信念「社会に貢献する」という強い思いを持って、今後も大学院での学びを深め教職の道を邁進していきます。

月間カンファレンスの価値
～静岡ラウンドテーブル開催～

ミドルリーダー養成コース1年/静岡市立清水桜が丘高等学校　小泉　真由子

月日が経過するのは本当に早い。教職大学院に入学し季節は冬となっている。春の福井、そして夏期集中では多くの書物と出会い様々なことに気付き考えさせられた。４月の私、いまの私…。自分自身を客観的に判断することはなかなか難しいが、少なくともこの教職大学院で学ぶようになり、昨年度と比べ仕事に向かう姿勢に変化が起きていることに間違いはない。それは、教員となり２０年、これまでは時の流れのなかで得た経験や感覚、その時々の感情に左右され判断してきたことが、学ぶことを改めて始めたことで自分自身の一つ一つの言動について考え、そこに意味を持たせるようになったことが大きく変わったことだと言える。そしてそれと共に変化したことは、物事への見方や考え方、つまりは本質の捉え方に違いがでてきたことだと実感している。そして日々の課題に向き合いながら、感じたことを考え、より深め、その意味は何なのかを問うようになってきている。なぜ、自分に変化が起き始めているのか？それは、日々の業務のこと、さらには悩み考えていることを毎月のカンファレンスで「言葉」で表現しているからであろう。自分自身の耳で自分の思いを聞き、奈良に集まる仲間に伝え、聞いてもらうことで課題に気付き、新しい問いが生まれる。この循環のなかで私の頭の中のもやもやとした部分に整理がつくと同時に、どこか納得のできなかった部分などの感情の整理が自然とできているのだと思う。改めて心理的安心感の中での対話が繰り広げられることで、いかにリフレクションに意味があるのかを実感している。そして言葉を聞いてもらうこと、新たな言葉や問いを頂くことで、私の頭の中が浄化され、活性化し新た

な言葉は私の更なるエネルギーとして加わることを感じている。同時に仲間の実践を聞くことで視野が広がり、新たな気付きが生まれていく。これこそが、「学び合うコミュニティ」なのだと改めて実感する。そうしていま、時間が経過するごとに院生としての学びの価値を感じとることができている。

これらの私が経験していることや学んでいること、そして考えていることを少しでも所属校に還元していきたい。そのためにも組織のビジョンを共有し対話をする仲間を少しずつ増やしていきたい。そんな思いで 4 月から運営している探究委員会という組織がある。カンファレンスと何が違うのだろう、むしろ日々顔を会わせているからこそカンファレンスとは違うより深い関係性が構築できるはずだ、と変化を期待し私自身が意気込んでしまったがばかりに週に１時間のこの組織運営に夏頃までは悩み苦しんでいた。しかし今は正直「ゆっくりいこう、焦らずに、一歩ずつ一歩ずつ」という思いに変化してきている。これもカンファレンスのおかげである。多くの迷いがあり、恥ずかしながらまだまだ仕事に気を遣っているのではなく「人」に気を遣っている部分も多いのが現状かもしれないが、少しずつではあるが仕事への思いを共有できる仲間ができ始めている。対話がないことを問題にしていない部分に対してそこに気付いてもらうことは本当に至難の業ではあるが、この小さな集団から変化を起こし、職場に新しい風を吹かせることができたら…と日々考えている。

そしてその新しい風として大きく学ばせて頂いたのが、奈良女子大学の鮫島先生が開催された「静岡・奈良開催の協働ラウンドテーブル」である。この教職大学院を紹介してくださった卒院生でもある静岡県立駿河総合高校の遠藤先生が事務局長となり運営してくださった静岡初の協働ラウンドは、JALOODA の話を軸に日本航空株式会社の皆様が登壇され、「仕事の美しさ」をテーマに開催された。会場が本校であったため私は鮫島先生、遠藤先生のラウンドを設計する方法なども学ぶことができ、貴重な経験をさせていただいた。ラウンドの世界観を味わったこの時間の価値は計り知れないものがあり、同時に参加した生徒たちにも大きな変化を生むこととなった。物事を概念で捉えていくことの難しさを体感したものの、何よりも「語る」「聴く」という対話をする姿勢がいかに重要かを生徒たちが経験し、価値を見出していた。静岡ラウンドに参加してくださった本校の先生方が大いに感動してくださったことが何よりも純粋に嬉しかった。小さな変化は少しずつ起きているのかもしれないと感じた瞬間でもあった。

まずはこの院生としての一年間を振り返ると共に、自分自身で日々を見つめ直し、職場の一員として、教師として今後何をすべきかを改めて考えていきたいと思う。

そのためにも日々実践を重ねていきながら、時に立ち止まり振り返りながら「思い」が共有できる仲間づくり、そして環境づくりの構築をこれからも目指していきたいと思う。

Sharpening one’s understanding through Mitori

ミドルリーダー養成コース１年/　福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

Anuniwat Dhanachat

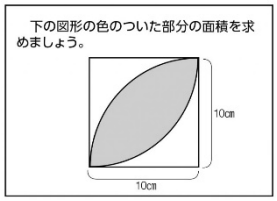
From the first day that I brought myself into the new environment, the new context I had never experienced before was almost 9 months already and 2 months left for this academic year as an internship student. It is priceless, and not able to evaluate the experience for myself. Presently, it is the right time to look back on what I have challenged; for sure, it is

countless. Since I officially start practicing the actual Japanese school context, many things' Japanese have come to greet and overwhelm me simultaneously. Yet, they sharpen my understanding of school education here in Japan.

With all these experienced, I would like to introduce the word "Mitori (見取り)" along with discussing some examples of my practice associated with this word. Sure, that this word is not internationally recognized, at the same time, there meaning is relatively similar to the word "classroom observation." Mitori, in a Japanese context, can utilize various aspects, and the meaning is significantly broader and deeper than classroom observation. Besides, Mitori is not limited to the classroom context but includes the school context or is more extensive than that. Mitori is the Japanese technical term primarily used in the educational field that comprised of two words; first, Mi (見) - from the verb Miru (見る) is mean to see or observe, and Tori (取り) - from the verb Toru (取る) means to take, pick up or catch something. Regardless, this word is typically used with the two critical phrases first, "Kodomo wo mitoru" (子供を見取る), which is to carefully observe the child, to try to record in detail what they say and do, and to predict what they are likely to do with authentic understanding; the core of what we observe is the child's goodness. The other word is "Mitori Chi-ka-ra" (見取り力) which is the ability to observe and record the things that take place in the school context.

For me myself, believe that the Mitori is significantly meaningful for me as a novice teacher to improve my pedagogical content knowledge and to back and forth between practice and theory. What is more, Mitori could benefit the teacher in various aspects, yet here I will elaborate on the aspect of classroom observation. When we observe, the classroom is not merely the things that occur and are able to see in the classroom yet have some things beyond. It seems too abstract to get the point. For instance, when we participated in each school's Lesson Study research meeting, the success, or the impressive lesson we observed was not the lesson itself. Beyond that is how teachers in those meticulously prepare the lesson, and the school curriculum, beyond the number of meetings, etc., for the meeting. Likewise, in the lesson we observe, we are required to understand the teaching sequence in the Course of Study (COS) and the sequence of the tasks in the unit that we will observe until the current lesson to make use in further study/learning. At any price, not able to assess the student's way of thinking, especially in mathematics, the major of the mathematics lesson is heavily focused on the sequence of the task and utilizes the previously learned knowledge to solve the problem, at the same time instill the sense of inquiry for the students in the next lesson. Thus, if we simply observe, we might derive the flow of the lesson, but if we want to deepen understanding doing some research in advance will allow us to supposition the points.

For illustration, if one observes this lesson to compile the area of the colored in the unit of the circle area, grade sixth without the pact of the sequence of the curriculum and tasks that related to this unit. The points that one might take out, such as the ways to cut the figure and calculate them or merely calculation. Suppose we comprehend how the flow of the sequence of teaching and task go. In this case, the one will come to the point where we evidently notice how students use the "how to" that they learned from the previous lesson to deal with the tasks; one may appreciate the beautifulness of the incompleteness of the ideas but full of place that we can learn from the student's idea; one might decipher how teacher raise student's ideas to contrast and compare in the classroom.



As the meaning formerly mentioned is relatively similar to the word classroom observation, yet, as the previous paragraph might perceive a slight difference. These all illuminated to me on the vertical and horizontal ways that we can take and make use of the Mitori to improve the quality of lesson and teaching

practice. This is one of the noteworthy changes for me about the aspect of classroom observation since before, I merely thought about classroom observation is the act of stepping into the class and taking notes on what happened in the class. Presently, the perception is extensively discrepancy, and observing the class requires an understanding of the sequence of the task, which is a significant factor in driving and cultivating students' mathematical thinking in the classroom such the case of mathematics.

P.S. While writing this, I worried whether the reader would get my point; hopefully, enjoy reading mine.

2年間を振り返って

ミドルリーダー養成コース２年/宮古島市立多良間中学校　上里　公人

この 2 年間、教職大学院に入ったおかげでたくさんのつながりができ、それに支えられてきた。

多良間島という沖縄の小さな離島に赴任してから他校との関わりがなくなっていた。小中学校がそれぞれ１校しかない島で、学校自体も１学年多くて 15 名の規模ゆえに同じ教科の先生もいない。コロナ禍でもあったがため気軽に研修にもいけない中で出会ったのが福井大学の連合教職大学院だった。

対面の機会こそ多くは持てなかったが、オンラインでの開催をしてくれたおかげで多くの校種、広い地域の先生方と交流できた。今まで教科のつながりだけ持っていたが、他教科や他校種の先生とも「子どもの学び」の視点を共有することで学びが深まることを知り、島でも小学校の先生方と交流する機会も増えた。それと悩みを共有する場となったこともありがたかった。

もうひとつ他地区と繋がることで私の中で当たり前だと思っていたことが貴重なことに変わった。地域との連携もそのひとつだ。宮古島に生まれた私は他人でも協力するのが当たり前という感覚を持って育ってきたため、結構地域の方へ積極的に協力を仰いだりコミュニケーションを取ったりしている。実践を報告する中でこの地域との関わり方はほとんどの先生方に良いものだという評価を受け、ときに羨ましがられることもあった。当たり前に備わったものを価値あるものと認識することで強みとして活かそうという気持ちが芽生えた。

交流は先生や学校以外にも広がった。むしろ教育でない仕事から学んだことの方が多かったのではないかと思うくらいたくさんのつながりと学びを得た。福井大学の夏期集中講座で読んでいる理論書も教育論ではないところから学びを得ている。私自身ビジネス書もよく読むようになった。とくに「TOYOTA」の社訓からもたくさんのヒントを得ることができたので薦めたい。

まとめると、一番の変化は一見関係なさそうな所からヒントを得ようとする姿勢だと思っている。今までは数学の本や教育関係の本ばかりを手に取っていたが、どんな事からでも学びを得ることができるということを知ってからは、より多方面の人の話を聞き、対話する意欲が出ている。

また、生徒との関わりではファシリテーションという言葉を得て、教師の仕事を「教えること」という枠から外れることができたのが私の変化だと思う。「対話」という言葉は何年も前から耳にしていたが、それでも私はしゃべり過ぎていた。良質な「対話」が分からなかったからだ。ただ漠然とグループ活動をさせる場面をもうけていればいいというような授業づくりをしていた。今はどういう課題を与えれば探究する価値を見いだし、意欲が湧き自然と対話が生

まれるかを考えるようになっている。答はまだ見つかったわけではないが。

たくさんの変化とつながりを与えてくれた 2 年間の経験を大切にこれからも私自身教師という仕事をもとに探究していきたい。

子どもを中心に考えるということ

学校改革マネジメントコース１年/まごころ認定こども園　髙尾　和人

教職大学院で学び始めて早くも９か月が過ぎた。私は、幼児教育の世界に本格的に関わり始めてまだ４年目で、とても未熟なのだが、各カンファレンスでグループを一緒にする先生方は私の話にもしっかりと耳を傾けてくださる。正直、私なんかが考えていることが、長いキャリアを積んだ先生方にとっては何の意味もないものではないか、これから教育の道を進んでいく若い先生方には必要ないものではないかと毎回緊張しながら話をしている。しかし、もし教職大学院の学びにおいて多角的な視点が必要であるならば、一般企業、児童福祉、幼児教育、いろいろな業界を経験している私の考えがなんらかのきっかけになって、どこかで起こる波紋の一部になることが奇跡的にあるかもしれない、そう信じて毎回のカンファレンスに臨んでいる。

そんな私自身の学びはどうなっているかというと、この９か月で、幼保連携型認定こども園を運営するうえでのものごとの見方はとても変わったように思う。教職大学院で先に多くを学ばれ、多くを実践されている先生方の園が実施している「公開保育」では、保育教諭の学びのあり方を再考することについて、大きなきっかけをもらっている。自身の教育実践を書くなかでは、自身が何を大事にして保育・教育を実践していくのかということにじっくりと向き合うことができている。

また、最近、あらためてよく考えるようになっていることは、私は本当に子どもを中心に考えることができているかということだ。

園長になって 1 年目の昨年度、私にはやりたいことがたくさんあった。他業種から来た私にとって、働くということに重きを置いた場合、保育教諭の労働環境はブラック企業そのものだと感じていた。また、マニュアルや手順書は多くあるが、実際にそれらに書かれていることに立ち返りながら業務を行っている職員はあまりおらず、PDCA サイクルがあまり機能していないのではないかと感じていた。実際、改善の取り組みを始めてみると、必然的にそうなっていたものが多く、結果的に変えることになった仕組みはそう多くはないが、私はより良い仕組みをつくるということに注力していた。もちろん、それらの働きやすさや保育・教育の質の安定につながる仕組みづくりは、まわりまわって子どもたちのためになることだ。しかし、そのような仕組みづくりをするなかでも、まず、何よりも大事なのは、常に子どもを中心に考えるということだ。それが本当に十分できていたのか、園長２年目になり、積み重なった様々なトラブルに対応し、教職大学院のカンファレンスでいろいろな先生方の話を聴くなかで、最近はそう考えるようになっている。

また、苦情解決などにおいても、１つ１つ誠心誠意対応し、その原因について分析し、その後の対策を考えてきたつもりだった。しかし、その過程で、保護者の言葉を聴くだけでなく、子どもの言葉や様子から子どもの気持ちや意図をくみ取り、子どものことを中心に考えて保護者と一緒に考えるための対話ができていたのか、今あらためて考えてみると十分であったか自信がもてなくなってきてしまう自分がいる。

もしかしたら、保護者にどう納得してもらうか、そこを意識しすぎてしまっていたような気がする。

正直、このような悩みは、最初から保育・教育を学んでいる方にとっては今さらな悩みかもしれない。しかし、私にとっては、教職大学院で学び、情熱あふれる先生方と対話しなければ、すぐにはたどり着かなかったのではないかと思う。もちろん、私の職場にも情熱あふれる保育教諭はたくさんいるが、一緒の職場、上下関係などから話しづらいことがあるなかで、教職大学院では、そういった普段のしがらみから少しだけ自由になれるというのがとても魅力的な部分の一つだ。『コミュニティ・オブ・プラクティス』に書かれている実践コミュニティが果たす機能の一つを身をもって実感している。

そういったことも含め、未熟なことを知りながらも後先考えず教職大学院の門をたたいてよかったなとあらためて思う。そして、このある種無鉄砲な行動力は私の持ち味なのかもしれないと、私自身を振りかえるきっかけになっている。まずは、今、私のなかで生じている、子どもを中心に考えることができているかという疑問にしっかり向き合っていきたい。そして、日々、たくさんのやらなければならないことに忙殺されているなかではあるが、少しでも余裕をつくって、私の周りに転がっているたくさんのきっかけに目を向けていきたい、今はそんなことを考えながら毎日を過ごしている。

気づきを促し、支えあう関係性づくりの構築

学校改革マネジメントコース１年/福井県立武生東高等学校　伊藤　貴子

早いもので、教職大学院での１年目も残すところあとわずかとなった。「学校の中で、学校間で、また地域と、学びあう関係性づくりをどのように行っていけば良いのか。」これが教職大学院でのカンファレンスを通してみえてきた私の一つ問いである。その問いに対する自分なりの取り組みを紹介したい。

①　対話力を養う

11 月下旬に「本歌取りの和歌をつくろう」の公開授業を行った。ここで、生徒の学びあいとして重視したのは、「言葉の吟味」である。本歌の世界を生かしながら自分の思いをどう表現すれば他者に伝わるのか。「よい和歌とはどのようなものか」検討したうえで、受け継がれてきた和歌の価値を意味づけその条件を意識しながら短歌を創作し、自己の作品の言葉を吟味し推敲することに力点を置いた。言葉の吟味や推敲には、３人グループによる「相手の考えや思いを引き出す問い」を投げかけることで、作り手に気づきを促し、推敲のヒントにしていく方法をとった。ある課題に対して、解決策を見出すには対話力の醸成が欠かせない。その中で、対話によって考えを刺激しあい引き出す問いの力を養成することは大切となる。「問い→考え」で回っていた対話が「問い→考えＡ→考えＢ→考えＡ´」のように対話が展開していく場面が見られたり、教科書に立ち戻って確認を入れながら対話が進んだり、問いがつながっていく班があり、対話の力が生かされている場面もあった。今回はモデリングやスキャフォールディングを取り入れながら授業を構成したが、少しずつフェーディングしていく必要もある。どの段階でその階段を上っていくのか、また、ファシリテーターを生徒に任せていく段階も含め、マネジメントしていく必要がある。

今回の作品は２月に本校の近くにある「万葉の里万葉館」で展示し、地域の方や来館者にも見ていただく予定である。そこで感想を頂き、対話が増えればと考えている。探究活動だけでなく、教科の特性を生かした授業を通して地域とつながることもできるので

はないか。また、武生高校の辻崎先生とは学校間で作品を交流できる授業も実践できればと話している。

②研究協議の共有

この公開授業には、外部から福井大学教職大学院の遠藤貴広先生、指導主事の滝波正代先生の他、武生高校、足羽高校、福井南高校、啓新高校、武生第五中学校の先生方に参加いただいた。どの先生も１つのチームにはりついて生徒の様子を見取ってくださり、チームの発言を具体的に取り上げながら、研究協議を進めることができた。

研究協議には授業の関係等もあり参加できない先生もいらっしゃるが、教員間の学びあいを深めるためにも、授業の空気感という実感を共有できた先生方に是非、研究協議の内容も共有したいという思いがあった。私自身他校の公開授業に参加しても、授業の関係で研究協議会に参加できないこともあり、残念に思っていたからである。

今回の公開授業では、若い先生方にも参加頂いたこともあり、研究協議の内容もお伝えすることで、これからの授業や生徒とのかかわりの中でのヒントがあればと研究協議に参加できなかった先生方にもメールや郵送で協議内容を伝えた。ある高校の先生からは「以前も授業を拝見したが、その際も今回も学びの目標を生徒と共有することを大切にしていた」と指摘頂き、自身が授業を行う中で大切にしていることに逆に気づかせて頂いた。また、私が武生高校の授業参観で刺激を受け、今回の授業でも取り入れた異学年の作品交流を受け、「自校でも取り組んでみたい」という意見も頂いたが、このことは場の共有により教員自身が実感として、よりよい手立てを共有できたとき、実践への結びつきのスピードがあがり、よい連鎖が生まれることを示している。また、「対話のできるクラスづくり」についての質問も頂き、やはり対話力の養成には関係性作りが欠かせないことにも気づかされる。このようなやり取りで、学びあいのつながりができたことは非常に嬉しい。

校内の先生方には、カンファレンスで何度も貴重なご意見を頂いている沓見小学校の夛田先生の実践「JD 通信」を私も取り入れさせて頂いた。「しってみん会やってみん会」と称して発行し、協議会で出た内容をお伝えした。本校生徒の課題の共有、汎用的スキルの構築に役立てられればと考えている。本校では６月と 11 月に公開授業を行っているが、この 11 月期には所属する学習支援部が中心となり、異教科、異年齢での教員間で 3 人グループを作り、互見授業を行い協議しあうようお願いし、その内容を職員会議で紙面で紹介した。全グループが協議まで進むことはできなかったが、他教科間で共通する学びに向かう態度の課題など共有できた点も多い。見えた課題を来年度どのような取り組みの中で育んでいくかこそが重要となる。

11 月のカンファレンスの中で、河野小学校佐々木先生の保護者を招いての公開授業は、児童の成長を保護者や他教員と共有したいという思いにあふれており、授業を見合うことの意味は、生徒を見取る温かな目を増やすことで、生徒のよりよい成長のために支えあい、知恵を出し合うことにもあるのだと改めて気づかされた。大学院での対話を通し、様々な気づきと励まし、知恵を頂いていることに感謝したい。

「協働」を考える

学校改革マネジメントコース１年履修/福井県教育庁嶺南教育事務所　植田　真美世

令和２年の３月末、「植田さんの好きにしたらいいよ」と言われて嶺南教育実践フォーラムの担当を引き継いだ。まだ自分事になっていない当時の私には「好き」の部分が抜けている。どうしたものかと頭

の片隅で考えながら、突然やってきたコロナ禍への対応に勤しんでいた。あれから約 3 年。多くの人に支えられ、手探りで少しずつ進んできたフォーラムの足跡は、様々な方向に広がりつながっている。

嶺南教育実践フォーラムは、毎年 2 月に開催している嶺南教育事務所の教育研究発表会である。地域を超えた嶺南の先生方が実践の交流を通して語り合い、つながり合う場として開催している。コロナ禍の影響で実施形態をオンラインによる複数日開催に変更し、参加しやすい学びの場になるよう取り組んでいる。「どうしたら参加したいと思えるフォーラムになるのか」をスタートに、「なぜ開催するのか」「どんな意義があるのか」「どんな価値があるのか」…、次々に浮かんでくる疑問に 1 つ 1 つ考えを確かめ進んできた。それらに対して、教職大学院での学びが理論を授け、矛盾を指摘してくれた。過去の経験と重ね、気付いたことを文章に表す過程で考えが深まった。それを読み返しつなげてみることで、さらに違った気づきが生まれた。そうして学んでくる間に出会った人の数は 100 人を超える。立場や経験は違っても、同じ目的に向かって真摯に取り組む教職大学院で経験した対話は、学びの深まりと次に向かう力を与えてくれた。

行き詰まる度に考えたことは、「協働」とは何かということだった。前任者から説明があった「協働」からは、みんなが同じ目的を持ち、緩やかにそこに向かっているというイメージを持った。しかし、所内での協働の機会が増えて意識が高まり、より具体的な場面での協働を考え出すと、イメージしていた「協働」のとらえ方が曖昧になる。双方向の関りによる協働に取り組みたい人と、業務負担を考えて一方向のままでできる協働に止めたい人と、どちらがよりよい協働なのかを比べて平行線になっていた。各自の協働の捉え方が違うと同じ論点で話すことができず、同じ目的を同じ言葉で表現しながら違った結論が導き出される。単純には解決できないこの難題に全課で向き合っていくにもまた、「協働」の意識が必要になる。

分からなくなってきた「協働」を、ピーター・M・センゲ『学習する組織』で学んだことと照らし合わせてみると、手段であるはずの「協働」がいつの間にか目的化してしまい、質の違いを段階の違いとして判断しようとしていることに気付いた。また、論点を合わせようと「参加者のために各課の特質を掛け合わせたセッションの場をつくりたい」という思いを前提としたことで「対等ではない立場」を作っていたことにも気付いた。状況やねらいに応じて一緒に可能性を探る過程が、私達にとって大切なことだったのだと分かった。そんな思いで改めて過去のアンケート結果を見ると、両者がともに「対等」や「尊重」という言葉で「協働」を表現し違和感を主張していることにも気付かされる。こうしなければ、こうするべきという考えに捉われることでフィルターがかかり、見たいものしか見えなくなるのだと実感した。感覚的な分析や判断だけでは見えないことがあると学んだ。

原点に返って、私が「好き」なフォーラムはどんな学びの場かを考えたとき、みんなで楽しい時間がつくれることを大切にしたいと思った。おそらく所員それぞれに違った「好き」な時間があるだろう。それを共有することから始めて、どんな協働がどれくらいできるかを探って行きたいと思う。それぞれが望む学び方が自由にできる学びの場を、参加者、発表者、運営者、みんなで創っていけたらいいと思う。

こうして振り返ってみると、様々な方向に広がり、つながってきたような気がしていたけれど、一周回ってまた同じ場所に戻ってきたという感覚もある。しかし、3 年前とは違って、足元にこれまでに進んできた足跡が見えている。目指す方向をみんなで確かめながら、次年度に向けた新しい「協働」を、残りの期間で始めていきたいと思う。

教職大学院で学んだこと

学校改革マネジメントコース2年/敦賀市立東浦小学校　堀川　和宏

令和３年の４月からこの教職大学院で学び始め、２年間の履修期間をもうすぐ終えようとしている。今は、１/１７締め切りの長期実践研究報告第一稿を書き上げ、再構成・推敲期間中にあたり、１/３１までに最終稿を完成させなければならない。３２年間の教員生活を振り返り、良かった時期も苦悩した時期も包み隠さずに省察した記録を、人に読まれることは恥ずかしいという思いもあるが、この大学院に入らなければ、決して行うことがなかった貴重な経験だったと感じている。

私がこの大学院で学ぶようになったきっかけは、管理職試験に合格した後、教育委員会より大学院での学びを紹介されたことによる。私は、この大学院で、管理職として知っておかなくてはいけない重要な教育法規や、学校で問題やトラブルが発生した時の対処法、職場での人間関係づくりといったノウハウ等を教えていただけるものと思っていた。しかし、実際の学びは私が勝手に想像していた講義形式の授業を受けるのではなく、大学院の先生方と、授業研究・教職専門性開発コース、ミドルリーダー養成コース、学校改革マネジメントコースの院生とが、一緒に「対話」を重ねることによって編み出されるものであった。初めて会う先生方との「対話」は、私にとってはとても緊張を伴う時間であった。オンラインで同じグループの先生が語っている際に、次に自分は何を話そうかと必死に考えていたあまり、話はうわの空で、感想を求められて困ったこともよくあった。そのような経験から、人の話を「傾聴」する大切さも学ぶことができた。

１ 年目の対話では、私がその年度に担当していた進路主任としての取組や、それまでの学年主任・進路主任の頃の実践を主に語っていた。今年度は、私が新任教頭として現在勤務している東浦小・中学校の小規模特認校制度についての実践や課題を中心に話題に挙げた。コースも立場も違う先生方との「対話」により、率直な意見や感想、時には応援の声等をいただくことができた。それぞれ違った視点をもった先生方との「対話」によって、それまで考えつかなかった新たな視野が開けることもあった。

不登校児童生徒の増加に歯止めがかからない昨今、子どもたちから、「どうして学校に来なくてはいけないのか？」といった問いを聞くことがある。「オンラインや教科書があれば、一人でも勉強できる。」と主張する子どももいる。大学院で学ぶ前は、そんな子どもたちには、自分なら「昨日までできなかったことが、今日できるようになるためです。」「昨日の自分より成長するためです。」「なりたい自分になるためです。」といった答えを用意していた。大学院で学んだ今後は、シンプルに「対話をするためです。」と答えようと思っている。「対話」とは、お互いの立場や意見の違いを理解し、そのずれをすりあわせることを目的に行うもの、「会話」とはお互い気のあったもの同士の、たわいのない日常の中でのやりとりのこと。私は、この違いを大学院での学びによって、実際に体験することができたと感じている。

大学院で出会った書籍、『学校を変える力　イースト・ハーレムの小さな挑戦』(デボラ・マイヤー著)の中の、「我々の仕事は、あなたがた子どもたちを幸せにすることではなく、強くすることです。」という一文も強く印象に残っている。私は、「仕事とは、人さまを幸せにするべきものでなくてはならない。」という仕事観を大切にしてきたが、その仕事観のさらに上を目指すものを教えられた。「どうして学校に来なければいけないのか？」の問いに、「あなたを強くするためです。」という返答が、心に落ちる子どももいるかもしれない。

私は、大学院で学んだことを、今後の教員生活において、子どもたちや職場の先生方に還元していかなくてはいけない。単に言葉としてだけではなく、実践を伴うものとして体現していきたい

冬期集中講座報告

安心・信頼を与える存在

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

高島　伊吹

この原稿を執筆している傍ら、私は長期実践研究報告（以下、報告書とする）を執筆している最中である。私は報告書を書く上で、一つのテーマを設けることにした。それは「本当の、リアルな自分を読み手に伝える」ことである。どうしてこのようなテーマを設けたのか。それは人、そして自分に向き合うためである。私は人から好かれたい、認めてもらいたいという思いを強く持っている。それは、私の自信のなさが故の行動である。私は「この人にはこんな自分を演じれば、認めてもらえるだろう」という憶測の元、人とかかわってきたように思う。勿論、すべての人とそのようにかかわってきたわけではない。ただ、心のどこかで本来の自分は認めてもらえないという気持ちがあった。しかし、そんな自分を演じる中で、「どうせ相手は本来の自分ではなく、人に好かれるための自分しか認めてくれない」と思い込み、私自身が勝手に相手を拒絶するという状況に陥ってしまうのだ。たとえ相手がどれだけ自分のことを認め、信頼しようとも、私は相手を信頼しきれず、どこか一線引いた距離感を保ちながら、相手と接していたのである。

そんな私に変わるきっかけを与えてくれたのは、連合教職大学院というコミュニティ（以下、大学院コミュニティとする）の存在である。このコミュニティの中で、私は様々な人と出会ってきた。これまで、私は人に悩みを相談することが苦手で、人に弱音を吐かないようにしてきた。ただし、私は大学院生として3年間を過ごす中で、大きな壁に何度か直面した。その壁は、私の人生の中で、見て見ぬ振りをし、大きくなっていった壁なのである。決して私一人では乗り越えることができないものすごく大きな壁である。そんな大きな壁を乗り越えることができたのは、今まで隠してきた、リアルな自分と向き合うことができたからである。そんなリアルな自分と向き合うことができたのは、大学院コミュニティの存在である。向き合いたくない自分、嫌な自分を時には肯定し、時には向き合うように、周りの方々が支えてくれた。そんな大学院コミュニティの存在に、私は本当に感謝している。そして、今度は私が私を支えてくれた方々を本当の意味で信頼したいと思うようになったのである。

相手を信頼するためには、まずは自分自身を信頼し、ありのままの自分を相手に知ってもらう必要がある。そう思い、報告書を執筆するという機会を活用し、リアルな自分の思いを伝えようと思ったのである。報告書を執筆することは私にとって、想像以上の価値があり、確実に新たな自分に気づき、歩みを進めるきっかけを与えてくれた。その反面、リアルな自分を描くという行為に対して、怖さという感情が常につきまとう。

冬期集中では、私含め3人の先生方とともに執筆を進め、5人の先生方と学びを共有していった。大学院コミュニティは私にとって安心感を与えてくれる場であることを改めて実感した。私が嫌だと感じていたリアルな自分を表出すると、先生は驚いたという感想と同時に、そんな自分を認めてくださった。私にとってこの上ない幸せである。3日間、安心して報告書を書き進めることができた。

私は、大学院コミュニティに所属し、様々な人との出会いを与えてくれたことに感謝している。私は来年度から新たなコミュニティに所属することになるが、今度は私が安心や信頼を与える存在となれるよう、コミュニティに向き合っていきたいと思う。

「長期実践研究報告」と向き合う

ミドルリーダー養成コース2年/二松学舎大学附属柏中学校・高等学校　向阪　望

12 月 24 日(土)から 26 日(月)の 3 日間、冬期集中講座 Cycle A が行われた。東京サテライトは板橋区役所にて対面で行われた。今回のテーマは「長期実践研究報告」の執筆である。1 年前の冬期集中講座の時に、M2 の先生方が取り組まれている姿を見て「まだ時間がある」と思っていたが、とうとう自分が書き上げる時がやってきてしまった。冬期集中講座までにある程度進めておきたかったのだが、予定通り進められず、焦る気持ちばかり先行していた。日頃、教員として生徒に「計画的に取り組みなさい！」と言っているのにも関わらず、自分自身が出来ていないことに反省し、いつも叱咤激励されている生徒の気持ちがわかる気がした。

福井大学教職大学院に入学してから今までの学びを振り返るために、カンファレンスのレポートや長期実践研究報告を書くために準備してきたものを読み返してみた。たくさんの方々に出会い、お互いの実践を聴き合い、様々なことを考えてきたことが改めて実感できる。実践における苦悩や人との関わりを共有することで勇気づけられ、次の発展的展開に向かって「頑張ろう」という前向きな気持ちで学校現場に戻る。実践報告が私たち教員にとって、「原動力」になっている。私の長期実践研究報告が読んで下さった方の原動力になれるだろうか、不安になったがやるしかない。

間もなく教員生活 18 年目が終わろうとしている。これまでの実践、この 2 年間の実践を振り返った。「自分は何をやっていたのだろうか？実践と言えるようなことが果たしてあるのだろうか？」自問自答した。私が取り組んできたことを書いてみた。時間が経過して振り返ってみると、その時に感じていなかったことや当時の思いが思い出されてきた。これが実践を「価値づける」ということかもしれないと考えた。ある意味後付けになる部分もあると思うが、生徒のために実践していたことは間違いない。私の場合はその時の「思いつき」が多かったように思うが、長期実践研究報告を執筆している今、実践してきたことに深い意味があったことを実感することができた。思いつきと言うと「見切り発車」のように聞こえるが、私の中ではその時の目の前にいる生徒にとって「何が必要なのか」「どのような力を身につけさせないといけないのか」を常に考えているということも自覚することができた。

冬期集中講座の最後にグループの先生方が書かれたことを共有した。途中経過であるが、それぞれの先生方の実践の軌跡を伺った。「長期」にわたる教育実践をどのように表現していくか。書いて、読み直して、他の先生からのアドバイスを聞いてまた書き加えての繰り返しである。語り合うと、不思議といろいろなことが思い出される。実践そのものだけではなく、その時の「感情」も思い出す。長期実践研究報告を書き上げる過程で、語り合ったことでブラッシュアップされていく。

「長期実践研究報告」に向き合う年末年始であった。私のこれまでの人生を振り返る時間となった。中学校・高等学校の 6 年間が私の基礎となっていることを確認すると共に、「学校」という場がどのような場なのかを考えた。教員という立場で学校を考えた

ときに、私は生徒にとって幸せな人生を歩むために「成長する場」になってほしいと願っている。そのために私たち教員は日々、生徒と向き合い、様々な実践を行っていると思う。「長期実践研究報告」は私たち教員の生徒への「思い」そのものである。実践内容は違えども、生徒に願うことは同じではないだろうか。長期実践研究報告に向き合うということは、生徒に対する思いを振り返ることかもしれない。長期実践研究報告を無事(?)に書き上げ、お互いの実践を語り合い、生徒への思いを共有し、様々な課題を抱えた学校現場に立ち向かっていきたいと思った次第である。

来年の自分のために

学校改革マネジメントコース1年/ 勝山市立三室小学校　酒井　範子

ずっと分からないことがあった。

長期実践報告に、自分のこれまでの歩みをなぜ記す必要があるのだろうか。私は納得解を見つけられずにいた。確かに、良いことも悪いことも含め、記憶しているエピソードはいくつもある。「今のクラスを来年も担任できるかどうかは分からない。１年勝負の気合いを持って仕事に臨め」これが、私が教えられた考えであり、納得解であった。だから、１年の最後には、「こんな子どもたちに育ったな」とほっこりしながらピリオドを打ち、心機一転、新たなステージに進んでいくことを繰り返していた。そんな、私の実践は１本の筋道が通っていないと思っていた。そして、後付けのような実践報告になってしまうが、それでいいのだろうかと悩んでいた。そもそも、長期実践報告とは、大学院に入学して学んだことを生かし、どのような改革を学校に仕掛け、その結果、どんな効果が生まれたのか、どちらかというと現在から未来を見据えた内容をまとめていくものなのではないかと考えていた。背表紙に実践報告のタイトル文字が入るだけの厚さにならなければいけないとあるときのカンファレンスで伺い、早く何か仕掛けなければ、結果を出さなければ書けないぞ！そう焦っていた。だからか、この冬期集中サイクルまでは、「学校のために何もしてない。どうしよう～。」と悩み、月間カンファレンスを待つときには感じることのない憂鬱さがあった。きっと、書けなくて手が止まる、空を見上げて途方に暮れるのではないかと、自分の情けない姿を想像していた。

令和４年度、冬の集中講座は、１２月２４日～２６日と１月５日～７日の６日間で開催された。１年目の私は、雪の心配もあったので、後半の１月５日からの３日間のオンラインに参加した。グループは、２年目の先生方３人と私の４人で、春日先生がファシリテーターについてくださった。「進捗状況を含め、自己紹介をしましょう」という春日先生のお言葉で、打ち合わせが始まった。自己紹介では、

「今、淵本先生のご指導が入った長期実践報告が届いたので、今日は、こちらを読み込んで修正していきます。」

「大体完成したので、最後の部分を仕上げていきます。」

「前半のサイクルから、ただひたすらに書き続けて、何とか目処が立ちました。」

と、先生方のご努力とご苦労が伝わる状況報告を伺った。２年目のこの時期は、こんなにも大変な思いをするのだなと恐怖を覚えた。ただ、なんとなくだが、この３日間で少し書けそうな気がしていた。それは、集中サイクルの中で、木村優先生より、「自身の歩みを振り返る転換点には、どんな壁があったのか、何が壁になっていたのか、その時に抱いた感情は？思い出すのが難しいときには、感情を思い出すといい。」

とご教示いただいたからだ。感情を思い出すという言葉は、長期実践報告を書く意欲となった。どれだけ書けるか分からないが、それぞれの分岐点で感じたことは思い出せる！そして、これまで気づかなかったストーリーが見えてくるかもしれない。そう思うと、肩の力を少し抜くことができた。

また、過去のニュースレターに、最初の問いの答えにあたる文言を見つけた。１２９号の今澤先生の記事。そこには、「自分史を読めば、先生という一人の教師がどのように形成されてきたかがわかるため、報告書を読む助けとなる」と書かれていた。そういえば、夏の集中講座では、専門書を実体験と重ねて読みながら、自分の実践の展開を捉え直し、まとめていった。小レポートを書く中で、１つのピースだった実践や学びが「自分」というパズルの中に上手くはまっていく感覚があったことを思い出した。

今回、「転機と感情」をテーマに、これまでの自分を見つめ直した。今でなければできない貴重な時間。この時間は、私にとって大切な時間となった。１年後、長期実践報告を提出するときの自分を想像しながら、来年も教職大学院で学び続けていく。

冬期集中講座での学び

学校改革マネジメントコース1年/坂井市立丸岡南中学校　福嶋　大晃

冬期集中講座では、自分の実践記録を省察し、ストーリーにすることに挑戦した。私は、文章を書くことがとても苦手で、厳しい３日間となった。実践記録をつなごうとしてもつながらず、ストーリーになっていかない。心が折れて諦めかけたとき、これまでのカンファレンスのレポートを読んだ。カンファレンスの課題から自分が気づいたことや、同じグループの先生方の話から、自分の考えの変化の様子が記録されていた。その記録は、つながっていかなかった実践記録をつなぐ貴重な財産だった。そのおかげで、なんとかレポートを形にすることができた。そのことから、カンファレンスでは、タイミングの合った課題を準備してくださっていたり、ファシリテーターの先生が私の現状や課題を引き出してくださっていたりして、私を次の実践へつなげてくださっていたことに気がついた。個別最適な学びを実践してくださっていたことに感謝した。

実践記録を省察するにあたり、多くの視点から考えることの重要性と、５つの「目」を紹介していただいた。①虫の目（狭い視点）②鳥の目（上から全体像を見る視点）③魚の目（流れを読む視点）④蝙蝠の目（逆から見る視点）⑤獣の目（目標に向かって突き進む視点）この５つの視点から私の研究テーマである地域連携の価値を考えて、冬期集中講座での学びとした。

虫の目。コロナ感染拡大により、地域行事・PTA 行事が中止や縮小となった。コロナ感染拡大以前と比べると、２年間ほとんど実施されていなかった。しかし、学校では授業を粛々と行うことができ、学校経営に支障はないのではないかと感じていた。どちらかといえば、地域と連携した活動がない方が、生徒が勉強に集中できるようになっている、教員の働き方改革が進んでいると、研究前の私は考えていた。

鳥の目。令和４年１２月２９日の福井新聞の記事、「政府は東京一極集中是正につなげるため、地方移住すると子１人１００万円」とあった。東京へ行って働くのではなく、地域の課題を解決するよう働いて地域活性化を進める方向へ、大きな動きがあるようだ。

魚の目。２３０年後に福井県の人口は０人になると予測されていると教えていただいた。私が退職するころには、私の家は“ぽつんと一軒家”になってい

るかもしれない。そうならないためにも、コミュニティセンターの方や地域コーディネーターの方は、地域活性化のため地域の行事に子どもたちが関わることができるよう、一生懸命に手段を考えている。

鳥の目・魚の目の視点の情報から考えると、「子どもが将来、自分の住んでいる地域に住み続ける」ことができるようにしていく流れがあると思う。そのためには「自分の住んでいる地域のことを大好きな子どもを育てる」ことが必要であると思う。地域の行事に子どもたちが参画することができるよう、地域と学校が連携することには意義があると考えた。

蝙蝠の目。地域と連携した活動や、保護者と連携した組織 PTA を廃止した学校を想像する。授業は教員と生徒だけで行い、地域の方にゲストティーチャーとして来てもらうこともない。PTA 行事もなく、保護者同士で顔を合わせることもない。閉ざされた学校には不信感が募り、多くのクレームが届き、教員はその対応に追われる。また、教員だけでは多様性がなく、対応できないトラブルも発生する。その学校で育った子どもは、将来、その地域に住むことはないと思う。その地域の人口は減少する、と私は予想する。

獣の目。生徒と協働して「自分の住んでいる地域の祭に主体的に参加できる仕組み」を実現することができた。関わった生徒たちは、目的・目標・手段を明確にもち、主体的にゴールへ向かって突き進んでいた。その様子を見て、私も教職大学院での学習を続けることができた。

今後も生徒主体の活動ができるよう、５つの「目」を大切にしながら、教職大学院での学びを深めたいと思う。よろしくお願いします。

これまでの自分と向き合いながら

学校改革マネジメントコース1年/美浜町立美浜東小学校　一瀬　憲幸

１２月。冬の集中講座 Cycles のガイダンスでは、柳沢先生が以下のことを話された。

「大きく長い展開を捉えなおす。『その場面で、その当時なにを考えていたのか』を捉えなおす。当時-しばらくたった後-現在、それぞれの深まりを描いていくと良いのではないか。それが実践把握の深さにかかわる。今回、これまでの自分と向き合いながら自身の取り組み今後のアクション設計にも繋がるはず。実践の展開がしなやかに発展していくはずである。人から借りてくることはできないので、大変苦しいチャレンジになる。行き詰ったとき、壁に当たった時に、難しいと判断したときにその壁の先に行ってしまうのも一つの選択。先に進んでしまってその壁を見てみることも一つの方法である。それは実践的に、そして今後の知恵にもつながるのではないか。レジリエンスのように」

そして、グループの中で、福井大学の加藤先生（以前のカンファレンスで、美浜町で勤務をされていたこと、その当時、同じように勤務していた私の父の様子などについて、懐かしみながらお話してくださった先生。つながりがあるということは本当に喜ばしいことである）からは以下のことをお聞きした。

「長期実践報告は、ああだったこうだったという経過だけでは面白くない。その経過の中に含まれている状況や風土などを、当時の様子から見とれたものと今振り返ることができものを比較すると良いのでは。そうすることによって、見方、考え方、価値付けを振り返って書くことができるのであろう。自身の思考の変容を書くのはとても良いと思う。『自分を語る』のは、読み手に本質を捉えてもらうことができるのではないか。自分を出すことができない実践報告は、あまり意味のないものではないのか？」

今回の冬の集中講座 Cycle では、夏の集中講座 Cycle３の際に記した、「自分のこれまでの背景、出会った方々から得たキーワードとこれからの実践をつなげて」を読み返しながら、今の自分が感じることやその時点での思いとの相違点等を加筆修正していくことから始めた。また１０月からスタートした自身の実践の途中経過を綴り、「自分を語る」ことにした。

自分の実践の展開をとらえ直し、表現していく中でふり返る教員として学校に携わった２０数年間。時代は大きく変わり、社会の構造も変化し、教員という仕事の役割、そして、世の中からのイメージも変容している。しかし、子どもたちの可能性を引き出し、今よりすてきな社会づくりに貢献する仕事であり続けることは、これからもきっと変わらないと信じて従事している。

自分自身の学校での実践を改めて振り返ると、たくさんの疑問符が付く。恥ずかしながら、自分自身、これまで「実践を積み重ねながら、学び続ける教師」であったことには、全くもって自信はない。どちらかといえば、情熱と感性のようなものを頼りに、目の前の子どもに正対し、学校の同僚との協働を大事にして従事してきた。自分が取り組んできた実践はこれだと自信をもって展開しきれるものは、正直あまりない。夏の Cycle３冒頭の木村先生のお話、チームに分かれた際の石井先生のお話。そのお話の中で「ストーリー」という言葉が繰り返された。今年度から教職大学院で学ぶにあたり、研究のテーマとして考えた連携と協働、そしてその一端として１０月から校内で実践し始めた東小学校 minimini ワークショップ。その実践をなぜ行うことを考えたのか、自分自身のこれまでをふり返ったときに、２０数年間の教師生活の中で、ずっと大切にしてきたことがどうつながるのか。まずはその「ストーリー」を綴ることから始めていった。

これまでの自分と向き合い、記していくことは何とも気恥ずかしい部分もある。しかし、教職大学院の先生方が語ってくださったように、自分自身の歩みを文章として記していくことで、これまでを振り返るだけではなく、自分自身の思考の変容を感じたり、実践に向けての思いを再確認したりすることができた。また、カンファレンスでは長期実践をまとめられている先生方の思いをお聞きする中で、自分の実践の推進に向けて背中を押していただいた気がした。

教職大学院での２年間のストーリーが、残りの教職人生にどう繋がっていくのかを楽しみにしながら、皆さんとの対話を大切に、学びを深めていきたい。

区切りを前に思うこと

学校改革マネジメントコース２年/あわら市芦原小学校　五之治　多美

教職大学院に入って 2 年が過ぎようとしている。いよいよ長期実践研究報告の最終締め切りが目前に迫り、今回の長期実践研究報告に区切りをつける時が来ている。入学当初から「長期実践研究報告を書くプロセスは実に苦しい」と聞いていたが、その通りだったと思う。私にどんな混乱が起きていたか。

１つめは「スパイラルにはまる」だった。こんなに集中して、自分のしてきたことを振り返ったことは、今までなかったと思う。何度も何度も過去に遡って紐解く。頭の中にスパイラルの図が置かれていた。自分が変っていない、同じようなところにいるように思えるもどかしさと、同じようでいて意味づけが変っていくややこしさがあった。1 年前に振り返っていた実践やその意味づけが、今、長期実践研究報告を書

く段階にはその実践の別の部分に光が当てられ、別の意味づけがあったことに気づく。意味づけの迷いと章立てでの位置づけでの迷いが起きた。スパイラルの区切りどころが分からない。頭がクラクラすることが多かった。

2つめは「削れない執着」だった。長期実践研究報告には全ては書けない。何を書き残し、何をそぎ落とすかを迷うことが多かった。エピソードの意味を考える。これは分岐点だったのか、それほど大きな意味はなかったのか。そんな中、なかなか捨てられないたった数行のエピソードがページ上に貼り付けられ宙ぶらりんになっていた。過去から現在に往復しつつ、前後がつながり意味づけられていった。そのときになってようやく小さなエピソードに閉じ込められていた自分にとっては大切で、執着した理由が分かることがあった。自分に、もう一度出会い直したようなすっきり感がもてた。

3つめは、「現在進行形の思いとの折り合い」だった。長期実践研究報告を完成させるには、実践の途中であっても一度区切りをつけ、全体を見直す時間が必要なことは分かってはいた。しかし、私は、日々の実践で新しい気づきや取組に出会うと、そこにも気が向いてしまう性分だった。書くことに集中せず、見渡しながら歩き、また材料を手にいっぱい拾ってくる。終わりを自ら遠ざけてしまっていた。（これは、長期実践研究報告を書くことで、アンテナが過敏になっていて、余計、現在進行形の実践への意味づけ行動が促進されてしまっていたのかもしれない。）

とにかく長期実践研究報告を作成する、実践やその意味づけを文章に綴り、形にする過程は、なかなかの大仕事だった。あと数週間後、そんな大仕事を終えて、ほっとしている自分に出会えるはずである。

今、教職大学院での時間を振り返ってみると、この2年間、つながることができた人や著書がたくさんあった。その出会いは、自分の視野や展望を大きく広げてくれた。感謝の気持ちでいっぱいである。

2年間という区切りがすぐそこに迫っている。その区切りを越えても、自分の中でつながった思いは、続いていくと思う。

出会えた皆さんにお礼の気持ちと、これからも、また「どうぞ よろしくお願いします」という気持ちでいっぱいである。

まとめではなく、再出発 ＋ ありがとうございました

学校改革マネジメントコース2年/福井県立福井南特別支援学校　谷口　隆一

皆様、良いお正月と同時に、集中した執筆の時間を過ごされたことと思います。今回の冬期集中で、画面上で再会した県外の仲間から、去年のこの時期にはこんなことを書いていましたね、と言われ、読んで覚えていてくれたことに驚きと感謝の気持ちでいっぱいになりました。その方の報告を含め、皆さんの書かれる長期実践報告書を読むのがますます楽しみになってきたとともに、そろそろお別れなんだなあと、寂しさも募ってきますが、「いかん、報告書先だ」とそれを振り払っています。

冬期集中では、拙稿を読んでいただけるお二人の先生方が、ファシリテーターとして自分の考えを辛抱強く聞いてくださいました。「生徒の学びの変化を縦軸に捉え、教員の学びの変化を横軸に捉えてみると、本論の中で交わる部分が見えてくる。掘り下げること・自分の考えをもっと書いていくことで、単なる事実の記録から、省察の記録として価値あるものに

なる。深い思考が言語化されることで、学びへの発展が期待される」という、的確なご指導や励ましのお言葉を頂き、とても勇気づけられました。この場をお借りして、お礼申し上げます。少しずつ読んでいただくこともでき、事務局のお取り計らいにも感謝いたします。

Ａ日程では、オンラインのおかげでコロナウィルスを仲間に感染させる心配もなく、参加ができました（21 日から、無症状でしたが自宅療養していました）。グループの仲間から、「ゆっくりとした成長」や「本人の気持ちに添うこと」のお話があり、大事にしていきます。

グループの皆さんに、それぞれの学校で、特別な支援を必要とする児童生徒と他の児童生徒との交わりの様子を伺うことができました。大学院の先輩の長期実践報告書の中に、学校を超えて交流することにも価値を感じ、「相手の幸せを実感することが自分の幸せと感じることは、どんなに素晴らしい教科書からでも学べないと思う」とありました。そのことに刺激を受け、自分も今の学校に来てからの２年間、その機会を探っていました。実現したのが、奇しくも 12 月 21 日で、自分は自宅から zoom で交流の様子を見ていました。本校生徒が書いた礼状を読むと、生徒が新しい喜びを得たことがよく分かりました。（自分の長期実践報告の中の一部で、学校目標を達成する上で、自分の強みを生かして自分がどのような貢献をできるかをまとめる予定なので、最後の仕上げのこの日はその場で見たかったのですが。）

その長期実践報告のタイトルですが、最初は、「質の高い教育集団」という語を借用していました。後述の「言葉の捉え方」ではありませんが、なんだかしっくりゆかずにいたところ、仲間からも、集団に基準の質があるようで好みではないと教えてもらい、タイトルを改めることにしました。ありがとうございました。

Ｂ日程では、グループの仲間から、「風通しのよい」ということをどのように捉えているか、という投げかけがありました。その言葉の捉え方ひとつにしても保護者（朝挨拶を交わすだけで、風通しがよいと感じるそうです）と考え方の違いが生じることを再認識しました。ひとつの言葉の意味をどう捉えるか、人それぞれで違うので、共通理解が大切ですね。（そういえば、Ａ日程の仲間から、学びのピクトグラムが提示されました。「深い学び」を自分は難しく考えていたのですが、なんだ、知識・技能を習得することや自分の考えを形成することは「深い学び」なのだと気付き、目から鱗が落ちた思いでした。）

ファシリテーターの先生は、解決方法は、親と学校の間に子どもをはさんで議論することだと教えてくださいました。「どのように子どもを育てていくか」を中心に話していくと、話はまとまるそうです。

暮れもぎりぎりまで学校に残っていたし、年明けもすぐ学校の仕事が始まる、この正月にどれだけ書けるか、という話にもなりました。逆に、こうやってじっくりと取り組むことができるのだから、幸せに思わないといけないね、という話も出てきました。コロナ感染で家族が大変だったのでその気持ちが分かります。皆様、からだに十分留意されながら、1 年、2 年、3 年の締めくくりをしましょう。これからの新しい出発が順調でありますように！

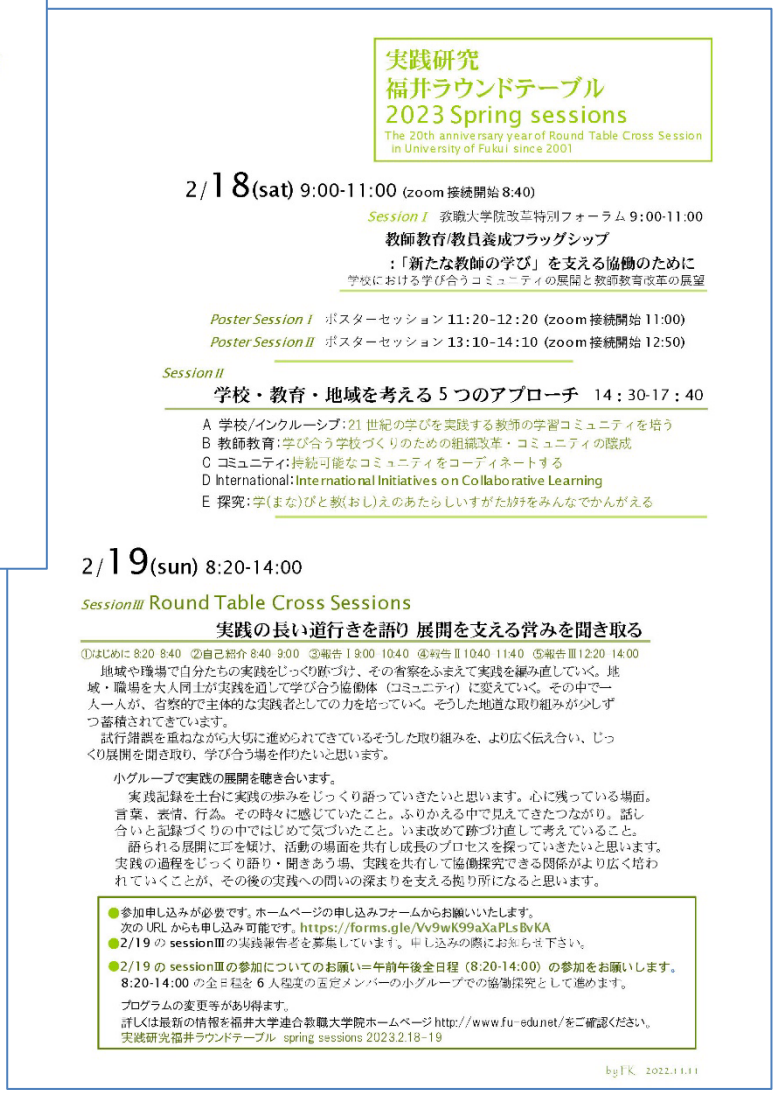
実践研究福井ラウンドテーブル　2023 Spring Sessions　開催！

ラウンドテーブルは、既に終了しています。ご了承下さい。

2 月 18 日、19 日に、実践研究福井ラウンドテーブルが開催されます。
詳しくは、HP をご覧ください。https://www.fu-edu.net/story/2108

参加の申し込みは、HP 内申し込みフォームか、以下の URL からお願いします。
申し込み URL　https://forms.gle/Vv9wK99aXaPLsBvKA

以降のページに特別フォーラム、各 Zone の概要を掲載します。



実践研究
福井ラウンドテーブル
2023 Spring sessions
The 20th anniversary year of Round Table Cross Session in University of Fukui since 2001

2/18(sat) 9:00-11:00 (zoom 接続開始 8:40)

Session I　教職大学院改革特別フォーラム 9:00-11:00
教師教育/教員養成フラッグシップ
：「新たな教師の学び」を支える協働のために
学校における学び合うコミュニティの展開と教師教育改革の展望

Poster Session I　ポスターセッション 11:20-12:20 (zoom 接続開始 11:00)
Poster Session II　ポスターセッション 13:10-14:10 (zoom 接続開始 12:50)

Session II
学校・教育・地域を考える 5 つのアプローチ　14：30-17：40
A 学校/インクルーシブ：21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う
B 教師教育：学び合う学校づくりのための組織改革・コミュニティの醸成
C コミュニティ：持続可能なコミュニティをコーディネートする
D International：International Initiatives on Collaborative Learning
E 探究：学(まな)びと教(おし)えのあたらしいすがた方法をみんなでかんがえる

2/19(sun) 8:20-14:00

Session III Round Table Cross Sessions
実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:20 8:40　②自己紹介 8:40 9:00　③報告Ⅰ 9:00 10:40　④報告Ⅱ 10:40 11:40　⑤報告Ⅲ 12:20 14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々に感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

●参加申し込みが必要です。ホームページの申し込みフォームからお願いいたします。
次の URL からも申し込み可能です。https://forms.gle/Vv9wK99aXaPLsBvKA
●2/19 の sessionⅢの実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。
●2/19 の sessionⅢの参加についてのお願い＝午前午後全日程（8:20-14:00）の参加をお願いします。
8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。
プログラムの変更等があり得ます。
詳しくは最新の情報を福井大学連合教職大学院ホームページ http://www.fu-edu.net/をご確認ください。
実践研究福井ラウンドテーブル spring sessions 2023.2.18-19

by TK　2022.11.11

2023 年 1 月 24 日更新

実践研究福井ラウンドテーブル 2023 Spring Sessions

Special Session 教職大学院改革特別フォーラム　　2023 年 2 月 18 日（土）9:00-11:00

オンライン（Zoom 使用）

「新たな教師の学び」を支える協働のために

学校における学び合うコミュニティの展開と教師教育改革の展望

2022 年 12 月 19 日に中央教育審議会から『「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）』が出された。ここで「新たな教師の学びの姿」として、子供たちの学び（授業観・学習観）とともに教師自身の学び（研修観）も転換し、教師にも「主体的・対話的で深い学び」が求められることが改めて確認された。

本フォーラムではこれまで、理論と実践の往還・融合、教員免許更新制廃止後の研修改革、教員養成フラッグシップ大学構想といった点から教師教育改革の展望を共有してきた中、学び合うコミュニティを培う校内研修とそのネットワークが改革の重要基盤となることが前回改めて確認された。学校を教師が学び合うコミュニティとして持続的に発展させるために、どのような取り組みが求められるか。福井の公立中学校での実践の展開を事例にした前回に続き、今回は福井の公立高校での取り組みに注目したい。以前は高校での校内研修がなかなか進まないと言われることがあった中、少なくともここ数年の福井県内の公立高校の中には、確実に校内研修を進展させている学校が多数あり、地殻変動とも言える状況となっているからである。

今回は特徴的な取り組みを展開している２つの県立高校の実践事例を共有しながら、学校で教師が持続的に学び合うことを支える教師教育改革の展望を探りたい。

趣旨説明

情勢報告：　中教審答申後の教師教育政策の動向

文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課 教員養成企画室長　小畑 康生

実践的提案１：

福井県立若狭高等学校 教諭　兼松 かおり

実践的提案２：

福井県立武生高等学校 教諭　辻﨑 千尋

コメント

独立行政法人 教職員支援機構 理事長　荒瀬 克己

他

省察と展望

福井大学大学院連合教職開発研究科長・教授　柳沢 昌一

〈コーディネーター〉　福井大学 理事（企画戦略担当）・副学長　松木 健一

福井大学大学院連合教職開発研究科 准教授　遠藤 貴広

Zone A　学校

※対面とオンラインのハイブリッド形式での開催です。申し込み時に参加形態をお選びください。

21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

－多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校・園の在り方を探る－

Zone A は、これまで「21 世紀型の学びを支える教師の学習コミュニティを培う」というテーマを掲げて、学校や園が持続・発展していくための授業改革・教師協働の在り方について考えてきました。加えて、多様な背景や困り感を持つ子どもも含めたすべての子どもが、あるがままの存在として生き、育つことのできる教育の在り方についても議論を積み重ねてきました。そこでは、子どもがありのままの自分を出しにくい学校の状況があり、また教師も「主体的・対話的で深い学び」を実現することが難しいなどの悩みが共有されてきました。このような状況を踏まえつつ、教師間、子ども間、教師と子ども間の学習コミュニティの学びを深めていくためには、対話や協働の在り方をもう一度見つめ直すことが重要である点を参加者とともに共有してきました。これらの視点は、教育・保育を考える上で極めて重要だと言えます。前回 2022 Summer Sessions では、子どもたちとのくらしや授業の中での「探究」を支える教師協働の在り方や、子どもたちの主体的な学びを支えていく過程での学校の変容に焦点を当てて議論してきました。

そこで、実践研究福井ラウンドテーブル 2023 Spring Sessions では、子どもが個性や能力を発揮し、学び合い育ち合う学校を実現するために、一人ひとりの子どもに寄り添って学校の当たり前を問い直し、教職員が協働していく組織をいかに構築していくのかについて、そこでのリアルや苦労なども含めて参加者のみなさまと共に協働探究し、子どもと子ども、子どもと教師、教師と教師の対話や協働の質をいかに高めていくのかを検討したいと思います。

Connection	14:00-14:30	オンライン接続
Orientation	14:30-14:40	オリエンテーション 対面会場　教育系１号館２階大１講義室
Session Ⅰ	14:40-16:00	
Symposiums		「多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校づくり」
＜シンポジウム＞		＜シンポジスト＞
	14:40-15:00	信州大学教育学部附属松本小学校　教 諭 片原　範子
	15:00-15:20	福井県大野高校　定時制　教 頭 上中　一司
		探究的な学習プロセスの中で、相互作用を通して子どもたちが学び合っていくストーリー、それを支える先生たちの組織・コミュニティについて話題提供を踏まえて考えていきます。
全体討議	15:20-16:00	＜コーディネーター＞ 福井大学連合教職大学院　宮下　正史
＜休憩＞	16:00-16:20	
Session Ⅱ	16:20-17:40	*Breakout Room*　*対面会場は当日ご案内します*
Cross-session *現状共有と明日への展望*		Session Ⅰ の議論に基づき、参加者それぞれの学校づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。校種等をクロスした小グループ形式での対話を編み込み、実践をデザインし、展望を生み出します。

Zone B 教師教育

学び合う学校づくりのための組織改革・コミュニティの醸成
－教師の力量を高める校内研修の在り方－

今日の学校教育においては、これからの変化の激しい時代の中で持続可能な社会の担い手となる子どもたちの資質・能力を育むため、主体的・対話的で深い学びの実現など、教育の質的転換・向上が大きな課題となっています。教師は主体的・継続的に学び、協働して力量を高めていきながら、互恵的に学び合い高め合う組織づくりにも一層取り組んでいく必要があるなど、学校は大きな変革の中にあります。また、自治体、学校、地域、大学をつないだ広いコミュニティの中での教師の学び直し、Society5.0 という社会を見据えた学校組織の新しい在り方が求められています。

Zone B「教師教育」では、教師の主体的・対話的で深い学びを目指した校内研修や協働研究の在り方について、展望を拓いていきます。今回の Zone B では、協働研究に取り組む教員の実践や、先進的に改革に取り組んでいる学校の変化などの多様な実践を共有し、校種を超えて学び合う学校づくりのための組織改革・コミュニティの醸成の在り方について共に考えていきたいと思います。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

なお、今回もオンライン会議システム（Zoom）を用いて実施します。

Orientation　14:30-14:40

Session I　14:40-16:40　Symposium

＜話題提供＞　行政

福井県教育庁　学校教育監　中森　一郎

＜実践報告＞

大野市立陽明中学校　校長(前 大野市立下庄小学校　校長)　大石　貴昭

福井大学教育学部附属義務教育学校 後期課程　研究主任　藤川　洋平

＜インタビュアー＞

福井大学連合教職大学院　教授　清川　亨

福井大学教育学部　助教　小林　渓太

＜進行＞

福井大学附属義務教育学校　校長

福井大学連合教職大学院　教授　牧田　秀昭

（敬称略）

自律的に学び続ける教師集団の校内研修の在り方について展望を拓いていきます。

Session II　16:50-17:40　Forums

実践報告を踏まえ、参加者それぞれが今後の取組にどのように生かし、つなげることができるか、小グループで協議します。

Zone C　コミュニティ

持続可能なコミュニティをコーディネートする
～世代間の相互作用は地域に何をもたらすのか～

Zone C では、持続可能なコミュニティをコーディネートするというテーマで、地域の学習活動を支える公民館主事の方、地域の活性化に取り組んでいる方、そして地域と協働しながら教育活動を展開する教育関係者の方などが集いながら、シンポジウム等で対話を通じ、長く探究を続けてきました。

若者や外部の視点を取り入れ、地域を活性化させていこうという動きも報告されました。その後、地域と学校の連携なども言われるようになり、「持続可能なコミュニティをコーディネートする」の範囲を少しずつ大きくしながら、今はいろいろな地域の支え手（主事さんをはじめ、学校、若い世代など）が地域とどのように関わり、どのような取り組みをしているのかに焦点を当ててきています。

例えば、学校現場においては、地域住民の協力を得ながら地域の産業や自然を活用した取り組みをしたり、地域における課題解決に向けて児童・生徒が主体的に活動をし、学校と地域が一体となって展開したりする取り組みも進められています。「総合的な探究の時間」で探究活動を行う高校生が、地域と関わり、地域を活性化していく取り組みも盛んになりつつあります。

Zone C では、今回は高校生たちがどのように主体的にまちづくりと関わり、どう活動を展開しているのか、また地域の公民館と中高生がどのように互いを巻き込み合いながら、どう活動を展開しているのかといった視点で報告をいただきたいと考えております。彼らの活動が地域を活性化し、彼ら自身も元気になっていく姿が見えます。

私たち自身が、こうした取り組みを共有し、つどい、つながり、新たな価値をつむいでいくことを通して、いかに持続可能なコミュニティをコーディネートすることができるのか、それぞれの活動も振り返りながら、世代間の相互作用は地域に何をもたらすのかを対話を楽しみつつ探っていきたいと思います。

14:30～14:40　主旨説明

14:40～16:05

Session Ⅰ　「つながる想い・広がる世界～高校生によるまちづくり～」

半田智咲 氏（福井県立福井商業高等学校２年、学生まちづくり班３・４期生、「高校生プレイヤー」として活動中）

コーディネーター：河合恭江

14:40～15:15　実践報告・質疑応答

15:15～15:45　小グループでの話し合い（自己紹介含む）

15:45～15:55　休憩

15:55～16:05　全体共有

16:05～17:15

Session Ⅱ　「地域を創造し、思いやりの心を育てる～公民館活動を通して～」

田中典子　氏（福井市社北公民館主事）

コーディネーター：嶋田直美

16:05～16:40　実践報告・質疑応答

16:40～17:05　小グループでの話し合い

17:05～17:15　休憩

17:15～17:40 全体共有と全体セッション～ふり返りと展望～

全体ファシリテーター：冨永良史

Zone D International　　＜同時通訳あり＞

International Initiatives on Collaborative Learning: Teacher Education Reform through Lesson Study

The Fukui Roundtable is held semi-annually in February and June. The Roundtable consists of five zones (A, B, C, D, E). Zone D International provides a platform for collaborative learning on practices and future prospects for teacher education reform inside and outside Japan.

Since 2021, as part of its global development, the University of Fukui has been focusing on the Nalikule College of Education and its demonstration school in the Republic of Malawi and following the process of their reflective lesson study. In June 2021, Nalikule College of Education shared their initiatives and collaborative learning through lesson study in their own context in Zone D. From June 2022, teachers who have studied at university of Fukui also share their progress.

This Zone will consist of two sessions; symposium and “Roundtable”. In the symposium, the symposiasts will discuss the purpose approaches, results, and challenges of lesson study in their contexts. In the “Roundtable”, educators from various countries will share their lesson study practice and learn from each other in small group discussions. We hope that these examples will stimulate you to reflect upon your own practices. These sessions will also be translated to Japanese.

Zone D では、実践における協働的な学びのプラットフォームを提供し、国内外の教員養成の展望を拓くことを目的とし、世界各国の教育関係者と実践や学びを共有し、捉え直しを行っています。

2021 年からは、福井大学が行っているマラウイ共和国のナリクレ教員養成大学及び附属高校との協働と連携して実施しています。加えて 2022 年 6 月からは、福井大学教職大学院で学び、帰国後授業研究に取り組んでいる実践の報告も行っています。そこでは、子ども中心の授業や協働探究学習について語り合ってきました。今回も引き続き、様々な実践を聴き合う中でより良い子どもたちの学びについて探ります。この Zone での事例紹介と議論を通して、参加者自身の実践と省察が深まることを期待しています。

なお、本セッションは英語での議論となりますが、**日–英の通訳を行います**ので、ご希望の方は、申し込みの際に通訳希望としていただき、当日は通訳用の Zoom に接続するためのデバイスを**別途**ご用意ください。

Session I	15:00-16:00	*Symposiums*
		1. Lesson Study in Nalikule College of Education and its Demonstration School
		2. Importance of Lesson Study in developing country's Education
＜Symposiast＞		Mr. Kondwani Daniel Vwalika, Nalikule College of Education
		Mr. Chhoem Sosakkona, Kor Koh secondary school, Cambodia
＜Moderator＞		Mr. William Tjipto, University of Fukui
＜Commentator＞		Mr. Masato Kosaka, University of Fukui
*Session*II	16:20-18:00	*Roundtable*　Sharing and learning from each other’s practices in small groups.

The following guest speakers are placed in each group:
Mr. Khanyile & Ms.Shongwe (Eswatini), Mr.Sankura, Mr.Yoseph, Ms. Madebo & Mr. Tefera (Ethiopia), Ms.Chiwaya, Ms.Malema, Mr. Phiri & Ms. Chanya (Malawi), Mr.Murwanashyaka (Rwanda), Ms.Boqwana, Ms.Billa & Ms. Mokotjo (South Africa), Mr.Amanya, Mr.Ezati, Ms. Kalule & Mr. Mudde (Uganda), Mr.Smit & Ms.Manyando (Zambia)

Closing	18:00-18:10	Ms. Kyoko Ishii

福井ラウンドテーブル 2023 SPRING SESSIONS

Zone E 探究　学びと教えのあたらしいすがたカタチをみんなで考える
○○学校の困り感（事）にチャレンジしよう

Zone E 探究では、「学びと教えの新しいすがたカタチ（ニューノーマル）」をテーマにして、子どもたち・若者たちと大人たちが世代を超えて探究します。

今回は、ラウンドテーブルでの「学び」と「探究」を学校での「学び」と「探究」にしっかりつなげることを大事にして、ある困り感（事）を抱える○○学校を題材に、みんなでその○○学校の困り感（事）にチャレンジするワークショップをおこないます。それぞれの学校での学び・探究のけいけんとちえをわかち合って、みんなではっそうを跳ばして学校の困り感（事）にチャレンジしましょう！

1. 日程　2022年2月18日（土）

11:00 - 11:15	受付１☆
11:20 - 12:20	ポスターセッション１☆
12:25 - 13:00	受付2☆
13:10 - 14:10	ポスターセッション２☆
14:30 - 17:40	ワークショップ「○○学校の困り感（事）にチャレンジしよう」

【進め方】

（1）　○○学校の困り感（事）しょうかい
（2）　チャレンジワークその１
（3）　プチ・レポート 困り感（事）にチャレンジしている学校
（4）　チャレンジワークその２　&　アイデアのシェア

2. 会場　対面：福井大学文京キャンパス

受付	教育系１号館１階ロビー
ポスターセッション	教育系１号館１階・２教育系１号館１階の教室（予定）
ワークショップ	総合研究棟Ⅰ　13階 大会議室

オンライン：　Zoom

☆ポスターセッションで、遊び・学び・探究・プロジェクトを発表してくださる子どもたち・若者たち・大人たちを募集しています。ご発表いただいた方には　福井大学大学院発行　発表認定書　をお贈りいたします。ポスターセッションの２つの時間の前後に、受付をおねがいします。

Schedule

2/5 Sun. 長期実践研究報告会

2/18,19 Sat, Sun. 実践研究福井ラウンドテーブル

3/23 Thu. 学位記伝達式

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【 編集後記 】今月は長期実践報告会やラウンドテーブルなど大きな振り返りの機会があります。この 166 号の記事からも、皆様がそれぞれの思いで自分の学びを振り返っておられる様子がよく伝わりました。一つの終わりは次への始まりでもあります。今年度末に修了となる方も、この教職大学院での学びが、これからの実践に生かされていくよう、ますますのご活躍をお祈りしております。（M）

教職大学院 Newsletter　No.166

2023.3.11 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院　福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507　福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp